

教養の学びは、キャンパスの広がりの中にある

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-11-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古森, 勲 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/10098/7998 |

共通教育フォーラム

福井大学共通教育センター(文京キャンパス)



巻頭エッセイ

テーマ

「共通教育の過去・現在・未来」

教養の学びは、キャンパスの広がりの中にある

監事 古森 勲

新聞記者として36年。政治、経済、文化、教育、スポーツ、平和、外交、安全保障など社会で起きたさまざまな事象と向き合い、いろんな記事を書いてきた。取材は、日本国内だけでなく海外へ及んだ。取材先で出会う人々との交流には緊張もあったが新しい発見があり、楽しかった。17回の転勤・異動と20回の引越しを繰り返しながら、移り行く世相を記事でどう描いてきたのだろうか。

大学を卒業し記者としてスタートした初任地は高知、坂本龍馬の生誕地である。龍馬を育てた土佐は過疎化と苦闘していた。その取材経験が都市問題へ関心を向けさせたのだった。次の和歌山では、吹き荒れていた大学紛争が和歌山大学でも深刻になっていた。大学本部や学舎が封鎖され、取材する目の前で学生同士のゲバ棒による乱闘が起きた。そして社会部へ。大阪万国博覧会開幕間近の大阪の街は改造中で、地下鉄工事現場ではガス爆発が起き、死者79人を出す大惨事があった。石油コンビナートの煙や車の排ガスによる大気汚染はぜんそく患者を増やし、都市の繁栄が人間の命を脅かし始めていた。

再び四国に戻った高松では、当時の激化していた受験競争をテーマに教育問題に取り組んだ。香川県は、全国学力テスト初期のころ日本一を続けた実績があった。取材班を編成し、「香川の教育」のタイトルで幼稚園から高校までの教育現場を訪ね、教師や父母ら取材し、92回連載し教育現場の実相を掘り下げた。

20世紀の末期に海外取材が舞い込んできた。企画のテーマは20世紀の出来事から21世紀への教訓を探す「20世紀からの伝言」。担当する舞台は中国、ドラマとなる出来事は日露戦争。100年も前の出来事だったので、自信もなければ取材の展望もなかったが、興味だけがわいてきた。ともかく取材してみよう、と春取材チームに加わり、夏には激戦地だった旅順へ行き下調べ。秋の本格取材で教訓をおぼろげに固め、年末にかけて詰め紙面化した。8カ月もかかった。

海外取材はさらに続いた。世界の課題である「核兵器廃絶への道」、日本が直面している「高齢化社会への備え」がテーマだった。いずれも記者としてそれまで取材したことがないテーマだったが、これまでの取材とは違う新しい目でみて、聞き、記事に書く。不安もあったがアメリカ、カナダ、オーストラリアへ行ったのだった。

記者になりたい—大学時代(1962年~1966年)に見たNHKのテレビドラマ「事件記者」に突き動かされた。さまざまな出来事に挑む能動的なスマートさにあこがれたのである。でも、実際の記者生活はスマートさだ

けではなかった。厳しかった。でも、書いた記事が励みになったと喜ばれたり、逆に抗議されたり…どっちにしてもやりがいがあった。

でも、大学を卒業したばかりの新米記者が社会で初めて取材する相手は、その道のプロばかり。その人たちを取材するとき頼りになったのは、元記者の講師が体験を交えながらジャーナリストとしての心構えを語ってくれた新聞学だった。そのほかの科目は、よく分からない。ただ、1、2年の英会話をその後も続けておけばよかったと悔やんでいる。

教養科目の学びについて思うことがある。学生のとき課外活動で読書会を主宰していた教授のつぶやきを後輩が教えてくれた。「フルモリが記者になりたいと言ってるが、あんな本を読まんやつが…無理や」と。そう言いながらも読書の大切さを説き、「もっと読め」と言わんばかりに勧めてくれたのが夏目漱石の作品だった。そのひとつ「坊っちゃん」が記者時代のスランプ回復剤となってくれた。そのことを恩師には話していない。記者人生を貫くなら漱石の生き方を学べと言いたかったのだろうか。

教養科目には味がある。「もっと読め」は、教え子(私)に目標を越えさせようとする教師の粘りなのかもしれない。教養と言えば哲学者の鶴見俊輔さんの取材を思い出す。あの幅の広い知識についていけなかった。でも、鶴見俊輔集を傍らにテーブル起こしすると非常に分かりやすい文章になった。丁寧な言葉にはいつも粘りを感じた。そういえば読書会の教授の口から鶴見さんの名前がよく出ていたので、親交があったのかも知れない。

教養科目が根付くには、内面的にはそのひとの心掛けにあると思う。それに環境がその心掛けを育ててくれる。私は四季の中で春が好きだ。木々の芽吹きはやがて一面を萌えるような緑で覆ってしまう。その一瞬の期間新鮮な心地が蘇る。その新鮮さを記者は失ってはならない。幸い母校の大学のキャンパスは緑に包まれていた。教養は動いている知識といわれる。教養は、講義室だけで学ぶ科目ではなく、教師と学生が交じり合うキャンパスの広がりの中でも学べる科目である。

今、母校で国際関係特別演習とアジアメディア文化論という国際系の2科目を担当し、記者としての現場体験と取材データをベースに、国際関係の動きの捉え方や日本との関わりなどについて対論している。オーストラリアと中国からの留学生も受講する中で、情報の世紀と言われる21世紀の国際社会で活躍する楽しさ、面白さを伝えたいと思っている。